

もの言う牧師のエッセー 第77話

「名無しの権兵衛」

ボストンマラソン爆破事件や、いまだに続くシリア内戦においてのシリア政府による化学兵器サリン使用疑惑など、相変わらずイスラム周辺では物騒な話が絶えない。この様な痛ましい話を耳にする度に、普通に生活をしておられるイスラムやアラブの人々の慟哭が聞こえるようだ。中でも今年1月16日にアルジェリア東部イナメナスの天然ガス精製プラントで勃発したイスラム過激派による人質拘束事件は、これまで比較的テロと縁の薄かった日本に大きな衝撃をもたらした。英石油会社BPが運営する同プラントの建造に参加していた日本の大手建設会社“日揮”の社員を含む、10カ国の計39名の方々が殺害されてしまったのである。

事件発生当初から情報は錯綜し、限られたアルジェからの情報提供の中で、日本と米英仏には対応に差が出た。米務省の報道官は犠牲者3人の名前を挙げ、オバマ大統領が哀悼のメッセージを読み上げたのを初め、イギリスでは同国最初の犠牲者ポール・モーガン氏の写真が母親のメッセージと共に報道された。

が、日本では“7人”とかの数字ばかり。「被害者の安否確認」などと言いながら日本政府は英国や日揮を通じて情報を得るという受身に終始。25日になってようやく政府はこれまで公表を控えていた犠牲者10人の氏名を公表したが、いっぽうで日揮の川名浩一社長は記者会見で、犠牲者は“14人”と。何のことかと思えば「我が社は現地社員を含む14名の社員を失いました」。なるほど彼らにとっては“同じ釜の飯を食う”仲間を14人も失ったのだ。同じ事案でも立場によって全く対応が異なるということだ。聖書には

「さて主の使いが来て、アビエゼル人ヨアシュに属するオフラにある榎の木の下にすわった。

このとき、ヨアシュの子ギデオンはミデヤン人からのがれて、酒ぶねの中で小麦を打っていた。主の使いが彼に現われて言った。『勇士よ。主があなたと一緒におられる。』」

士師記 6章 11-12 節

とある様に、何と全能者である神が、さえない若者であるギデオンに直接名指しで祝福するシーンがある。ご覧の通りディーテールも非常に個人的で細かい。我らの父である神にとって

“匿名”はありえず、名無しの権兵衛など一人も存在しない。我ら一人ひとりを心から愛して下さり、それぞれの事案に心から対応される「主の使い」、キリストなのである。

2013-4-28

